

『発掘 宇治'14』

平成26年度 発掘調査・文化財速報



菟道遺跡荒槇・大垣内地区発掘調査（8～10月）



史跡宇治川太閤堤跡現地説明会（9月）

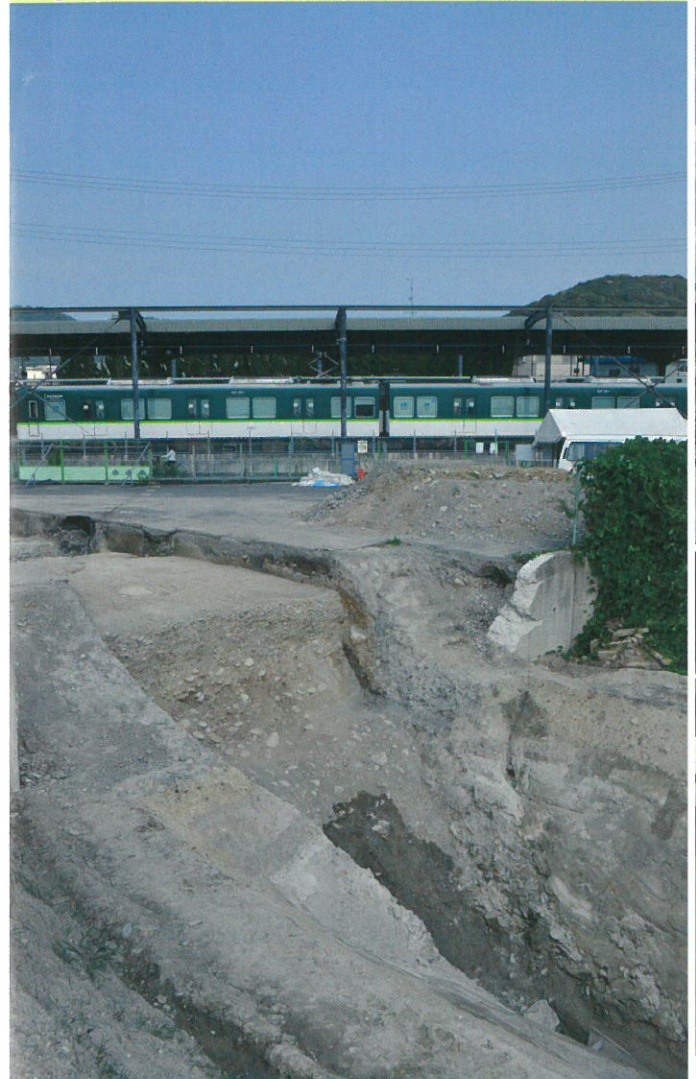


発掘ものがたり宇治2014（5～6月）



春の庵寺山古墳一般公開（5月）

宇治市歴史まちづくり推進課



史跡宇治川太閤堤跡・乙方遺跡発掘調査（6～9月）



大幣神事（6月）

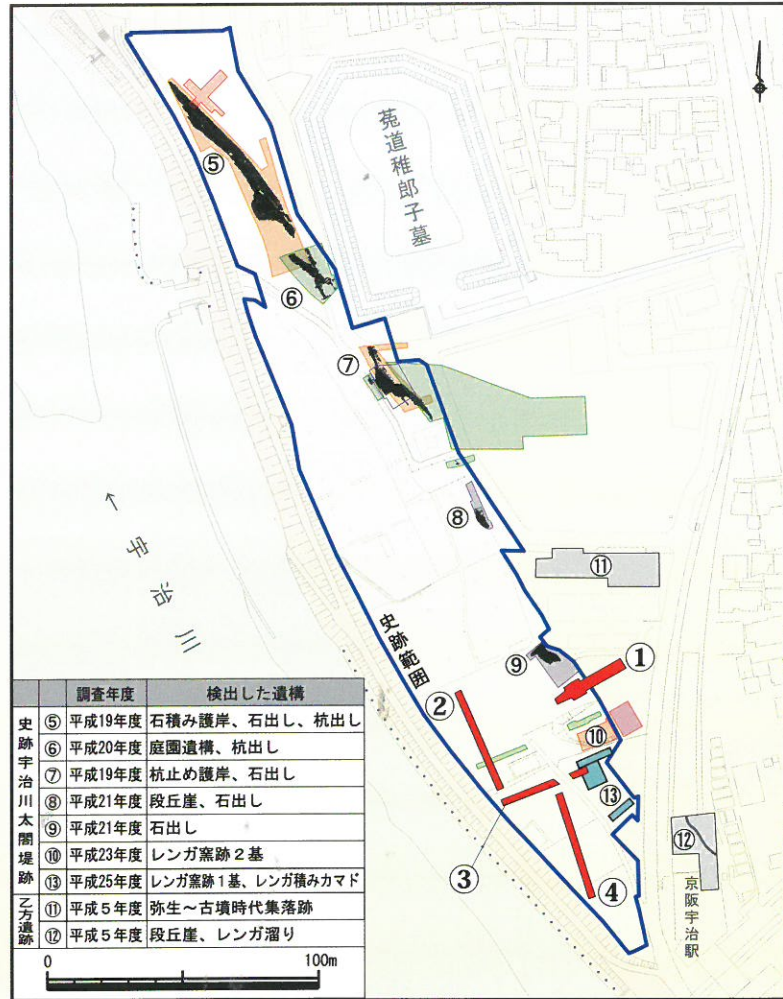
～ 太閤堤発掘速報 ～

史跡宇治川太閤堤跡平成 26 年度発掘調査成果

◇ 太閤堤とは・・・

天下統一を果たした太閤こと豊臣秀吉が宇治川流路を付け替えるなどした大規模治水工事による堤防等を総称して「太閤堤」と呼んでいます。宇治川太閤堤は「太閤堤」の護岸施設の一部です。宇治川太閤堤跡は平成 19 年に宇治川右岸で発見され、その後の調査で全長 400 m 以上にわたる護岸施設が確認できました。また、平成 21 年には当時の土木技術を具体的に示す遺跡として、国の史跡に指定されました。

平成 19 年度の調査では遺跡の北部と中央部で石積み、杭止め護岸、石出しを確認しました(写真1)。平成 21 年度には新たな石出し(写真2)、平成 23 年度には明治時代につくられたレンガ窯跡を発見しました(写真3)。また、宇治川太閤堤跡の護岸施設で使用する石材は頁岩や粘板岩とよばれるものです。この頁岩や粘板岩は板状に割れやすく、加工しやすい石材です。



史跡宇治川太閤堤跡 発掘調査位置図



写真1 杭止め護岸(位置図⑦)



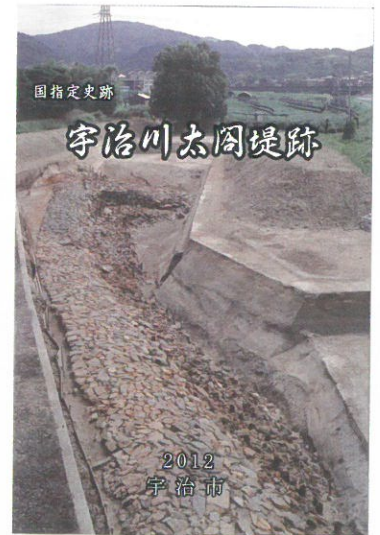
写真3 レンガ窯(位置図⑩)



写真2 石出し(位置図⑨)

◇ 平成26年度発掘調査

もっと太閤堤のことを
知りたい人は・・・
国指定史跡宇治川太閤堤跡
パンフレットをみてみよう！



パンフレットは宇治市役所6階
歴史まちづくり推進課で配布しています

写真4 河岸段丘斜面 (位置図①: 南西から)

平成26年度は史跡地の南部、4か所について発掘調査を行いました(左ページ位置図①～④)。

①では上流部にどのような護岸施設が存在するのかを調査する目的で発掘を行いました。成果として、昔の宇治川によって形成された河岸段丘斜面を確認しました(写真4)。斜面の裾では太閤堤の護岸施設に共通して使われている粘板岩がみつかりました(写真5)。粘板岩は平坦な面を川側に向けて据えられていることから、太閤堤の護岸施設の一部であると考えられます。

②③④は、もともと宇治川が流れていた場所です。調査では河川堆積土の上で耕作土と約1.8m間隔の耕作溝を確認しました(写真6)。ここでは近年まで茶畑が営まれており、これらの耕作溝も茶畑に関連する遺構だと思われます。この場所が宇治川の運ぶ砂に埋もれて陸地化した後、茶畑として利用されるようになったと考えられます。



写真5 河岸段丘面 裾部の粘板岩検出状況 (位置図①: 西から)



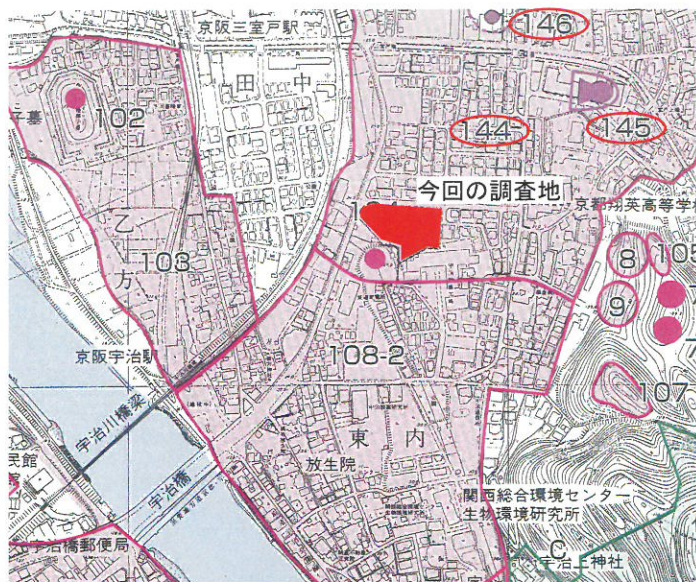
写真6 茶畑に伴う耕作溝跡 (位置図③: 東から)

菟道遺跡 荒槇・大垣内地区の発掘調査

菟道遺跡(右位置図144)は、現在の菟道地区の府道京都・宇治線より東方に広がる遺跡で、これまで古墳時代から室町時代の集落跡や門ノ前古墳(右位置図145)、谷下り古墳群(右位置図146)など様々な遺構が確認されており、川東地区の拠点的な遺跡と考えられます。今回の調査地は旧京阪宇治交通宇治車庫で、店舗の新築に伴い発掘調査を行いました。

調査の結果、調査地北部は表土直下で地山を検出し、調査地北西部で飛鳥時代の土坑群を検出しました。遺構面が浅いため残りはよくありませんでしたが、土坑の一つから須恵器の杯や壺が重ねられて出土しています。土坑の形状が不定形であることからその性格は明らかにできませんが、墓であった可能性も考えられます。

また、調査前の調査地はほぼ平坦な状況でしたが、調査の結果、調査地南部は深い谷であることがわかりました。ここからは杭列などを検出していますが、その周辺からは平安時代の土器や白磁などが出土しています。



菟道遺跡と周辺遺跡 位置図

『宇治市遺跡地図 2002年版』より一部加筆修正



<谷地形と上段の田畑跡>



<土坑の土器出土の様子>



<田畑跡と溝>



<飛鳥時代の土坑群>